

## 第10回自然保護指導員研修会・公開講演の実施報告

令和2年1月25日13:30~16:30、国立オリンピック記念青少年総合センターにて、関東地区から71名を集め、第10回自然保護指導員研修会・公開講演を開催したので概要を以下に報告する。

冒頭、岡田博行都岳連自然保護委員長から主管者挨拶があり、次いで、松隈豊委員長から主催者挨拶を兼ね自然保護指導員制度について説明を行った。そのあと団体自然保護委員会としての環境活動の状況を、栃木（江崎裕之委員長）、埼玉（増田修委員長）、千葉（濱田伸委員長）、東京（阿部幸子委員）、神奈川（松隈豊委員長）のJMCSA加盟団体から、次いで奥多摩小屋の現状について小高令子委員から、自然保護指導員の立場から活動概況について都岳連所属の武田耕治指導員からそれぞれ報告を行った。一段落の休憩の後、「木を知る・木に学ぶ」を演題に、樹木医の石井誠治氏から1時間ほどの講演を公開にて行った。講演の概要を次に記す。

### （石井誠治氏公開講演の要約）

年号が令和になって初めての正月をつい最近迎えたという事で、おめでたい「榊（本榊）」の小枝を手に取り、古くから日本の文化の中心としてあった京都に生える暖温帯樹木の「常緑樹」である「榊」の話から講演を切り出した。

「榊」は祭禮に用いられる見慣れた樹木の一つであるが、樹木に関心を持つには、「普通に見慣れたところ」に関心を持つことが肝心である。「榊」の小枝を見ていただくと先端近くの枝につく葉の葉柄の付け根に「嘴」のような芽がついている。その芽は次の年の枝と成長していくわけである。

「常緑樹」も落葉をするわけで、3年ほどで葉が取れる。「嘴」のような芽から枝の付け根の方向に辿ると「嘴」の芽が無くなるがその箇所が前年に芽から育った箇所ということです。常緑樹だから落葉しないということではありません、葉は展葉してから大体3年で落葉をします。桜などの「落葉広葉樹」は葉がついている期間は半年ほどで、

それは気候に関係します。葉が低温、特に凍結に弱く、また気孔があるため乾燥にも弱いことから、「落葉樹」は、冷温帯にあって、冬の気候から身を護るため、落葉をします。

今日の話の「栗」は「ブナ科クリ属」に分類され落葉広葉樹です。関西で生えている「カシ」は分類学的には「ブナ科コナラ属」ですが常緑樹です。関東でも低山でよく目にしますコナラやクヌギは「ブナ科」ですが落葉広葉樹です。ちなみに、日本で一番大きなドングリを付けるはオキナワウラジロガシという常緑樹です。欧州などでオークと呼ばれる樹種ですが日本語訳では「カシ」が一般的ですが、都内の半蔵門近くにある英国大使館の前の公園にはイングリッシュオークが植樹されており、この季節ですと落葉しています。分類学的には仲間でも生える場所の気候によっても異なった種類となるというものです。

次に本題の「木は動かない」の話に移って行きます。木の幹を見てみます（見本にキハダの輪切りを示しながら）。縦に裂ける樹皮はコルク質が厚く弾力があり、これを削ると鮮やかな黄色の内皮が現れる。その黄色い部分は生きた部分でベルベリンという成分を含み、胃腸薬や消毒薬リバガーゼの原料となる。その内側の茶色いところは心材と呼ばれ、白っぽいところを辺材と言います。黄色い内側の木部には導管細胞があって生成される傍から死滅していくとともに心材に向かって老廃物抗菌物質を送り込んで行きます。木が年数を経て太くなると、中心部は導管として不要になってくる。不要になった部分では、材の中に抗菌物質を詰め込んで生命活動としての物質の分泌は停止してしまう。それで一般的に心材は色が濃くなる。同時に死んだ細胞と言われている。中心にある空洞は腐朽菌が入り込んで分解してできたもので、その周囲を取

り囲むようにある黒い部分はタンニンなどの抗菌物質の痕。内皮のことを師部と呼び葉で作ったエネルギーを根に送り成長します。根の太い部分からは水を吸い上げるわけではなく、根の先端の白い部分が水を吸い上げる働きをします。根の太い部分は木を支えるのが役割です。

さて、同じブナ科の樹木でコナラ属にはいっぱい種類がありますが、クリ属にはクリしかありません。クリは耐水性に富み、土台材や線路の枕木として供される。日本人はクリに頼って生きてきた。三大丸山遺跡の発掘からクリの栽培跡や直径1m余のクリ巨木の柱も出土している。日本の文化はクリとともに膨らんできた。日本のクリはうまくいくと毬（イガ）の中に堅果が3個入っています。独特の臭気を放つクリの雄花ですが、長い花穂に密に咲いて、その基部に数個の雌花が付いています。クリは他家受粉し、他者（昆虫・鳥・風・水など）に手伝ってもらうため受粉確率から3個が結実するとは限りません。あの独特の異臭は虫を呼ぶためのものです。他のブナ科の樹木は無臭で全くの風媒で、クリの臭媒とは異なります。クリの雄花からは蜜も出ます。

では小野のシダレグリ群落の話をお話します。ただ枝垂れというとシダレザクラやヤナギを思い浮かべますが、長野県上伊那郡辰野町の小野地区に群生している奇形変種クリは曲がりくねった奇怪な樹形をしています。枝垂れはホルモン異常に原因し、どの樹種にでも発生します。枝がしっ

かり固まらないうちに伸びてしまうことから起きます。小野の木は、枝垂れた長い枝が途中で枯れ落ち、残った生きた枝の芽から長枝が出て、またそれが途中で枯れと落枝と萌芽を繰り返して、ジグザグに曲がった枝振りになる変異が加わっているのです。木々は陽光を求めて天へ枝を広げて生育して行く訳ですから、その逆となる枝垂れは不利となり、その分だけ人の助けを必要とするものです。小野には1000本近い群落となって居ます。この群落は室町時代から伝統で受け継がれ地元の人たちが下草刈りを行うなど管理をし続けた結果出来上がったものです。枝垂れは劣勢遺伝なのですが、この地域ではどの実生の幼木もまるで優勢遺伝のように育っています。懐かしい光景が広がるのは昔から変わらぬ自然の光景の維持管理をして来たからです。

1920年7月17日に国の天然記念物に指定されました。近くには旧中山道が通り人々の往来が常にあったことから、シダレグリの自生地は古くから人々に知られていたと言います。

最後に、今日は、難しい草木の話をしてきましたが、みなさんが一般の方に自然解説をする機会があった時には、そんなに難しい話をする必要は全くありません。誰もが知っているスギやヒノキにも沢山の話しがあります。知っていることを共通項にすれば良いのです。このことを、今後の活動の役立てて頂ければと思います。

(文責 自然保護委員長 松隈豊)

